

# タイ人日本語学習者のあいづちの使用実態と使用上の問題

— 初中級レベルの高校生の調査より —

カウイター・フォンサターポーン

(5480106822)

チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科

日本語講座・修士課程

2012 年度

氏名 : カウイター・フォンサターポーン

論文名 : タイ人日本語学習者のあいづちの使用実態と使用上の問題  
—初中級レベルの高校生の調査より—

主査 : 萩原孝恵博士

副査 : カノックワン・片桐・ラオハブラナキット准教授

ページ数 : 80 pp

### 要旨

初中級レベルのタイ人日本語学習者は日本語のあいづちが適切に使えない。その一因として考えられるのが、タイの中等教育における日本語教育での話し手重視・聞き手軽視の問題である。良い聞き手になるためには、あいづちがうまく使えることが重要である。しかし、タイの日本語教育では、話し手の立場には着目しているが、聞き手の立場にはあまり着目していないように思われる。そこで本稿では、タイ人日本語学習者の高校生のあいづちの使用実態と使用上の問題を研究課題とし、中等教育におけるあいづち指導案を提示する。

調査は、2012年12月から2013年1月に行った。調査対象者は、初中級レベルのタイ人高校生11名である。調査では、日本人教師との会話場面を設定し録画した。研究方法は「多声的ビジュアルエスノグラフィー」を用い、録画したビデオを日本語母語話者4名に見せ、それぞれのあいづちに対する印象についてコメントしてもらった。調査の結果、タイ人高校生は言語のあいづちの使用が少なく、笑いのあいづちの使用が多いことが明らかになった。そして、観察された「笑い」は、会話がスムーズに進められるようにという配慮や、相手との協調を表すあいづちの一形態であることが明らかになった。「うなずき」が多い生徒は良い印象であることも改めて示された。一方、日本語の会話の中で使用されるタイ語のあいづち「へー↑」、「๓๓」(?๑๑)、「๓๓」(ha?)、「ໂห」(hoo)は、日本語母語話者に悪い印象を与えることが分かった。

本稿では、以上の結果を踏まえ、最後にあいづちの6ステップの指導案を提示した。そして、タイでの日本語教育では、会話における聞き手としての立場をもっと重視し、あいづちの正しい使い方を指導すべきであるという見方を示した。

文学部東洋言語学科

院生の署名: \_\_\_\_\_

日本語講座

主査の署名: \_\_\_\_\_

2012年度

副査の署名: \_\_\_\_\_

# 目次

第1章	はじめに.....	1
第2章	先行研究.....	3
2.1	日本語とタイ語の会話スタイル.....	3
2.2	日本語のあいづち.....	5
2.3	タイ語のあいづち.....	8
第3章	研究方法.....	10
3.1	目的1：あいづちの使用実態.....	11
3.2	目的2：あいづちの使用上の問題.....	14
第4章	結果と考察.....	16
4.1	タイ人学習者のあいづち.....	16
4.2	タイ人学習者の笑いのあいづち.....	19
4.3	タイ人学習者の言語のあいづち.....	25
4.3.1	タイ人学習者の日本語のあいづち.....	25
4.3.2	タイ人学習者のタイ語のあいづち.....	28
4.4	タイ人学習者の非言語行動のあいづち.....	35
第5章	結論.....	39
5.1	日本とタイの文化差とあいづちの使用実態の違い.....	39
5.2	タイ人学習者のあいづちの使用上の問題.....	41
5.2.1	多すぎる笑い.....	41
5.2.2	間違えてしまった「へー↑」.....	41
5.2.3	タイ語のあいづちを多用することの印象の悪さ.....	42
5.3	中等教育でのあいづち指導への教案.....	42
5.4	今後の課題.....	46
参考文献	.....	47
資料	.....	49
謝辞	.....	80

## 表の目次

表 1	日本人の会話スタイルとタイ人の会話スタイル.....	3
表 2	先行研究における日本語のあいづちの機能.....	5
表 3	本研究における日本語のあいづちの機能と表現.....	7
表 4	多声的意見の協力者である日本語母語話者の背景.....	14
表 5	タイ人学習者のあいづちに対する日本語母語話者の印象.....	17
表 6	タイ人学習者の笑いのあいづちの種類と使用頻度.....	21
表 7	タイ人学習者の笑いに対する日本語母語話者の印象.....	22
表 8	タイ人学習者に観察された日本語のあいづちと使用頻度.....	25
表 9	タイ人学習者の日本語のあいづちに対する日本語母語話者の印象.....	26
表 10	タイ人学習者に観察されたタイ語のあいづちと使用頻度.....	28
表 11	タイ人学習者のタイ語のあいづちに対する日本語母語話者の印象.....	29
表 12	タイ人学習者のタイ語のあいづち “๑๐๐” (๑๐๐) に対する日本語母語話者の印象.....	30
表 13	タイ人学習者のタイ語のあいづち “๑๒” (๑๒) に対する日本語母語話者の印象.....	31
表 14	タイ人学習者のタイ語のあいづち “๑๓” (๑๓) に対する日本語母語話者の印象.....	33
表 15	タイ人学習者に観察された非言語行動のあいづちと使用頻度.....	35
表 16	タイ人学習者のうなずきのあいづちに対する日本語母語話者の印象.....	37
表 17	日本語のあいづちの例と観察されたあいづちとの比較.....	44

## 図の目次

図 1	情報過程と理解している信号.....	6
図 2	課題、目的、方法、手順.....	10
図 3	録画場面の見取り図.....	11
図 4	タイ語に翻訳し協力者の先生に渡したメモ.....	12
図 5	初中級レベルのタイ人学習者に観察されたあいづち.....	16
図 6	日本語にないタイ語の“๒๑๑” (๑) の母音.....	30
図 7	Iwasaki&Horie (1998) の分析結果と本研究結果との比較.....	40
図 8	あいづちの機能の重層性.....	43
図 9	初中級レベルの高校生日本語学習者へのあいづち指導案.....	46

## 第1章 はじめに

本研究では、初中級レベルのタイ人日本語学習者のあいづちの使用実態を調査し、その使用上の問題を明らかにする。会話には、話し手の役割と聞き手の役割という2つの役割がある。日本語の会話では、「話し手の役割」だけでなく、「聞き手の役割」も重要であり、良い聞き手は良い話し手だとも言われている。堀口(1997:38)は、「話し手の側から見ると、聞き手から全く反応がなければ話しにくく、期待通りの反応があれば話が進めやすく、質問が出ればそれに答えながら話を進めていくというように、聞き手の反応は話し手が話を進めていくための一つの指標となっている」と指摘している。

しかし、タイにおける日本語教育では、聞き手の役割にはあまり注目せず、ほとんど指導されていないように思われる。そのため、タイ人日本語学習者が日本語で会話をすると、あいづちが適切に使えないという場面に遭遇する。Mizutani&Mizutani(1987)は、外国人があいづちが使えるようになるためには指導や練習が必要だと以下のように指摘している。

Although *aizuchi* are essential for conversing in Japanese effectively, foreigners often find it difficult to become used to them. It requires training and effort to become able to give *aizuchi* properly. (Mizutani&Mizutani1987:21)

筆者は、日本語を勉強しているタイ人の生徒を福岡へ連れて行ったとき、日本人の先生とタイ人の生徒との会話で次のような場面を見たことがある。それは、タイ人の生徒たちが話を聞いているときに、日本人の先生の顔をただじっと見て聞いていたという場面である。そのため、その日本人の先生は、何度も生徒に「分かりましたか」と心配そうに尋ねていたのが印象的であった。

さらに、筆者自身にも同じような経験がある。それは、親しい日本人の先生と話すとき、筆者がいつも「ハ↑」「ハ↑」と聞き返すため、日本人の先生が驚いた顔をしているという経験である。その時は、なぜ日本人の先生が驚いた顔をしているのか分か

らなかった。しかし、その後あいづちについて話す機会があり、日本語の会話で「ハー↑」や「ハ↑」を使うと、印象が悪いことが分かり、恥ずかしかった。

こうした経験から、筆者はタイ人日本語学習者のあいづちに興味を持つようになった。そして、日本人と話すときに日本人に悪い印象を与えてしまうと、会話をスムーズに進められないのではないかと考えるようになった。

本研究における調査対象者は、筆者が勤務する C 高校の初中級レベルのタイ人日本語学習者 11 名である。あいづちを観察するために設定した場面は、日本人教師との会話場面である。調査対象とするあいづちは、言語のあいづち・非言語のあいづち・笑いのあいづちである。研究方法は、多声的ビジュアルエスのグラフィーにより行う。

本稿の構成は、第 1 章で本研究課題と研究のきっかけ、第 2 章で先行研究、第 3 章で研究方法、第 4 章で結果と考察について述べ、第 5 章で結論を示す。

## 第2章 先行研究

### 2.1 日本語とタイ語の会話スタイル

Iwasaki&Horie (1998) は、日本人は“Group oriented”（集団主義）で、その会話スタイルは“Collaboration style”（協調型）であると指摘している。一方、タイ人は“Independent”（個人主義）で、その会話スタイルは“Self-assertive style”（自己主張型）であると指摘している<sup>1</sup>。そして、こうした会話スタイルには、それぞれの文化的特徴が影響していると述べている。

表1は、Iwasaki&Horie (1998) の記述から日本とタイの文化的特徴と会話スタイルをまとめたものである。

表1 日本人の会話スタイルとタイ人の会話スタイル  
(Iwasaki&Horie1998より筆者作表)

	日本人	タイ人
文化的特徴	Group oriented	Independent
会話スタイル	Collaboration speech style	Self-assertive speech style
会話行動	1)Short backchannel utterances 2)Frequent use of utterances 3)Loop sequence 4)Open floor	1)Scarcity of BackchannelBehavior 2)'Infelicitous' topic shifting question 3)Self-assertive overlap 4)Parallel floor construction

Iwasaki&Horie (1998) は、日本文化とタイ文化の影響が会話スタイルに反映し、それが大きく4つの会話行動にみられると分析している。1つ目はあいづち、2つ目は会話への参加の仕方、3つ目は会話交替、4つ目はフロアの構造、すなわち会話の構造である。

表1について、まず日本人の場合からみていく。日本人は、グループ全員に関心を向ける。すなわち“Group oriented”、「集団主義」である。話し手側は、聞き手が会話の一部に参加できるように会話を進め、聞き手側も会話に参加するという

---

<sup>1</sup>本稿では、Iwasaki&Horie (1998) の“Group oriented”を「集団主義」、「Independent」を「個人主義」、「Collaboration speech style」を「協調型」、「Self-assertive style」を「自己主張型」と訳す。



「協調型」の会話が特徴である。聞き手は、話し手の話を聞いているが、邪魔しないようにするために、表1の日本人の会話行動の1)と2)に示されているような「短いあいづち」（例えば「ウン・エエ・アア」など）を高い頻度で使い、ターンが頻繁に交替する。また、会話の不一致を避け、同意しているかどうかを確認するために、3)の「ループ・シーケンス」を使う。「ループ・シーケンス」とは、話し手が聞き手にターンを渡し、話し手に戻ってくる連鎖のことである。また、会話は4)のような「オープン・フロア」で進められ、聞き手が会話に入りやすい構造になっている。

一方、タイ人は、日本人のようにグループを考えるのではなく、自分中心に考える。すなわち、タイの文化的特徴は“Independent”、「個人主義」である。そのため、会話は、話し手が話していることに対する反応を待たずに、自分で自分の話を維持していく。いわゆる「自己主張型」である。また、聞き手も会話の方向を支配する。表1のタイ人の会話行動の1)に示されているように、聞き手があいづちを使う頻度はかなり少ない。2)に示されているように、今話されている話題に関係のない質問をして話題をよく変える。そして、3)に示されているように、発話の重なりや、4)に示されているように、話し手の話題と聞き手の話題が平行して進んでいくといった会話構造の特徴がある。

Iwasaki&Horie (1998)の研究から、日本人の会話スタイルとタイ人の会話スタイルには、かなりの違いがあることが分かる。そして、タイ人日本語学習者がうまくあいづちができない理由も、タイ人の会話スタイルの影響であることが示唆されている。

## 2.2 日本語のあいづち

本節では、堀口（1988）、今石（1993）、メイナード（1997）の研究を基に、日本語の「あいづち」の機能を整理し、表2にまとめる。

表2 先行研究における日本語のあいづちの機能

（堀口:1988、1997、今石:1993、メイナード:1997より筆者作表）

先行研究	聞いている信号	理解信号	肯定信号	否定信号	感情表出	情報追加
堀口 (1988,1997)	○	○	○ (同意)	○	○	×
今石 (1993)	○ (不確定)	○ (確定)	○ 1) 納得 2) 共感 3) 同意	○ 1) 不信 2) 不同意	○	×
メイナード (1997)	○ (続けて)	○	○ 1) 支持 2) 賛成	×	○	○

堀口（1988）は、「あいづち」を5つに分類している。1つ目は「聞いているという信号」で、2つ目は「理解しているという信号」である。3つ目は「同意の信号」で、これは聞いて理解して同意する気持ちを表す信号である。4つ目は「否定の信号」で、聞いて理解しても、賛成ではないものである。5つ目は「感情の表出」である。また、堀口（1988,1997）は、あいづちの形態に関しては、3つあると説明している。1つ目は、色々な品詞が含まれる「あいづち詞」である。例えば、「ハイ」（感動詞）、「ナルホド」（副詞）などである。2つ目は、「繰り返し」で、「全体的繰り返し」と、関心を持った部分だけを部分的に繰り返す「部分的繰り返し」である。しかし、話し手の意図と聞き手の繰り返しが一致しない場合もある。3つ目は、繰り返しに似ている「言い換え」である。これは聞いた内容の繰り返しで、「全体的言い換え」と「部分的言い換え」に分けられる。一方、「先取り」と「確認」は、堀口（1988,1997）が「あいづち」と別に扱うとしており、本稿でも、堀口（1988,1997）と同じように「あいづち」と別にする。

今石（1993）は、「あいづち」の基底部分は「聞いている信号」ではなく、「理解している信号」だと述べている。そして、今石（1993:99）は、「あいづちの形式は、情報伝達の過程において使い分けられるものである」と述べている。それは、

図 1 のように、聞き手が話し手の情報を聞いているときに話し手の発話がまだ終わらないうちに打つあいづち、すなわち、話し手の意図が分からないであいづちを打つ形式の「不確定」と、話し手の発話が終わった後で打つあいづち、すなわち、話し手の意図が分かってあいづちを打つ形式の「確定」である。「不確定」には「ハイ、エエ、ンン」などがあり、「確定」には「アソウデスカ」などがあるという。

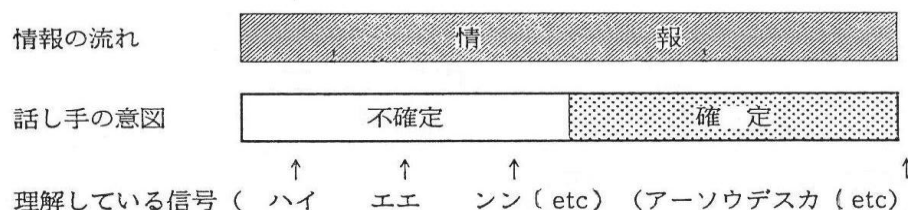


図 1 情報過程と理解している信号 (今石 1993:99)

今石 (1993) は、「くり返し」「完結」「補強」に関しては堀口 (1988) と同じように、日本語教育において「あいづち」と「くり返し」「完結」「補強」は分けた方が扱いやすいと述べ、「あいづち」と区別する立場をとっている。また、「非言語行動」に関しては、今石 (1993: 107) は「談話では、言語行動のチャンネルは『聞く』であり、非言語行動のチャンネルは多くの場合『見る』である」と述べ、言語行動と区別している。しかし、本研究では、「くり返し」「完結」「補強」は今石 (1993) と同じように「あいづち」と区別するという立場をとるが、非言語行動については「うなずき」と「首を横に振る」行動を「あいづち」として扱う。

最後に、メイナード (1997) を取り上げる。メイナード (1997) は、あいづちの機能は 6 種類あると述べている。1 つ目は「続けてというシグナル (Continuer)」で、聞き手が話し手に問い直す機会を見送った時に使われる信号である。2 つ目は「内容理解を示す表現」で、聞き手が話し手の確認を必要とする時に使われる信号である。3 つ目は「話し手の判断を支持する表現」で、話し手の判断を聞き手が支持する必要があると思う時に使われる信号である。4 つ目は「相手の意見、考え方に賛成の意志表示をする表現」で、話し手が聞き手に質問しそれ

に答えて打つ時に使われる信号である。5 つ目は「感情を強く出す表現」で、あいづちの感嘆詞や笑いなどを含んでいる。また、はっきり聞き手の感情を表現する場合もある。6 つ目は「情報の追加、訂正、要求などをする表現」で、話し手がそのまま発話順番を守っている間に聞き手が簡単な情報追加や訂正などの場合である<sup>2</sup>。しかし、メイナード（1997）は、1 つのあいづちが 1 つの機能を持っていると考えのではなく、重なることもあると述べている。

本稿では、以上の先行研究から日本語のあいづちの機能とその表現を 6 つに分類する。表 3 が本研究における日本語のあいづちの分類である。

表 3 本研究における日本語のあいづちの機能と表現

機能	あいづちの例			先行研究
1.聞いている信号： 「不確定」	ハア アー	ハイ ウン	エエ エ	堀口（1988） 今石（1993） メイナード（1997）
2.理解信号： 「確定」	ナルホド ソウ エエ	ソウデスネ ソウカナア ソウソウ	ア、ソウデス↓ ア、ソウカソウカ↓ アーソウナダ	堀口（1988） 今石（1993） メイナード（1997）
3.肯定信号	ウン	ソウソウソウ	ハイハイハイハイ	堀口（1988） 今石（1993） メイナード（1997）
4.否定信号	イエ アー	イエイエ イエ	アソウデスカ ウウン	堀口（1988） 今石（1993）
5.感情表出	エーッ マジー ホー へー	エ↑ ホントウ↓ マア 笑い	怒り 喜び 悲しみ 驚き	堀口（1988） 今石（1993） メイナード（1997）
6.その他	情報の追加	訂正	要求	メイナード（1997）

次に、タイ人がタイ語で会話をするとき、どのようにあいづち使っているのかについて先行研究をまとめる。

<sup>2</sup>メイナード（1997:160）より筆者がまとめた。

## 2.3 タイ語のあいづち

マラシー (1988) は、「タイ語のあいづち」には次の 3 つの特徴があると記している。

- (1) あいづちには、発話者の意志や感情がはっきり表現されるものと、そうではないものがある。そして、それぞれは、発話者の声調の変化、そして発声頻度によって、表現される人間の感情が変わっていく。
- (2) あいづちを使用する際、人間関係における心理的な距離の配慮が必要である。その距離にはタテとヨコがある。タテは、二人の社会的地位、年齢などの違いに基づいて上下関係が出来、その上下の距離は離れれば離れるほど下の者は上の者よりずっとあいづちの使用に対する配慮の頻度が高くなる。ヨコの距離は親しさの度合であったり、様々な出会いに発生する人間関係における形式の度合いである。この二つの度合いは逆の方向に進めば進むほど打ち合うあいづちはより形式的なものになる。
- (3) あいづちの使い方は、又、個人が属する社会的な階級によっても違う。上流の社会に属する人間同士は一般的な家庭に属する人間同士より使われるあいづちにはクラブのような正式な言葉が多い。  
(マラシー1988:30)

マラシー (1988) によれば、(1) の発話の声調の変化は 5 つあり、「中平調」「低平調」「高平調」「下降調」「上昇調」で、それぞれの声調は発話の感情を表しているという。たとえば、「中平調」であれば、聞いている信号を表すが、使用頻度が高くなれば、話が早く進んでほしく、話す権利がほしいという意味を表す。「低平調」であれば、迷い、考え込む意味があり、「高平調」や「上昇調」には、関心、納得という意味がある。そして「下降調」には、賛成を強調する意味がある。

(2) の特徴は、話し手と聞き手の年齢差がある「上下関係」で、年齢差が離れれば離れるほど下の者はあいづちの使用に対する配慮の頻度が高くなるという点である。

(3) の特徴は、上下関係・年齢差だけではなく、「内・外」によって「あいづち」

の形式が変わるという点である。家族や友だちなど親しい人でない場合には、男性は“กรับ”（クラブ）、女性は“กะ”（カ）を付け儀礼的なタイ語を使う。以上が、「タイ語」のあいづちの特徴である。

先行研究から、日本文化とタイ文化の背景の違いがあるため、会話スタイルに違いがあることが分かった。それは、「あいづち」にも違いがみられることが分かった。また、日本語のあいづちの定義・機能に関しては様々な研究があり、日本語のあいづちの形式が多いことも分かった。一方、マラシー（1988）のタイ語のあいづち研究により、タイ語は日本語のあいづちと違って形式は多くはないが、同じことばでもイントネーションの違いにより意味や機能を表すことが分かった。また、Iwasaki&Horie（1998）の研究から、タイ人の場合にはあいづちを使わず、意見や質問などを代わりに使っていることも分かった。

しかしながら、タイにおける日本語教育の現場では、聞き手としての日本語の「あいづち」の使い方についてはあまり着目されていない。そのため、タイ人が日本語のあいづちをどのように打っているかに関する研究もほとんどない。また、日本語教育の観点でタイ人日本語学習者のあいづちの使い方を調べた研究もない。そこで本稿では、高校生のタイ人日本語学習者を対象に、タイ人の日本語のあいづちの使い方とその問題点を分析・考察し、学習者があいづちが使えるようになるために、どうすればいいかを検討する。

### 第3章 研究方法

本研究課題は、初中級レベルのタイ人日本語学習者のあいづちの使用実態の調査・検討である。本研究課題を明らかにするため、2段階の調査を設定する。調査目的の1つ目は、初中級レベルのタイ人日本語学習者のあいづちの使用実態を調べることであり、2つ目は、観察されたあいづちの使用上の問題点を調べることであり、本研究における課題、目的、方法、手順は、下記の図2の通りである。

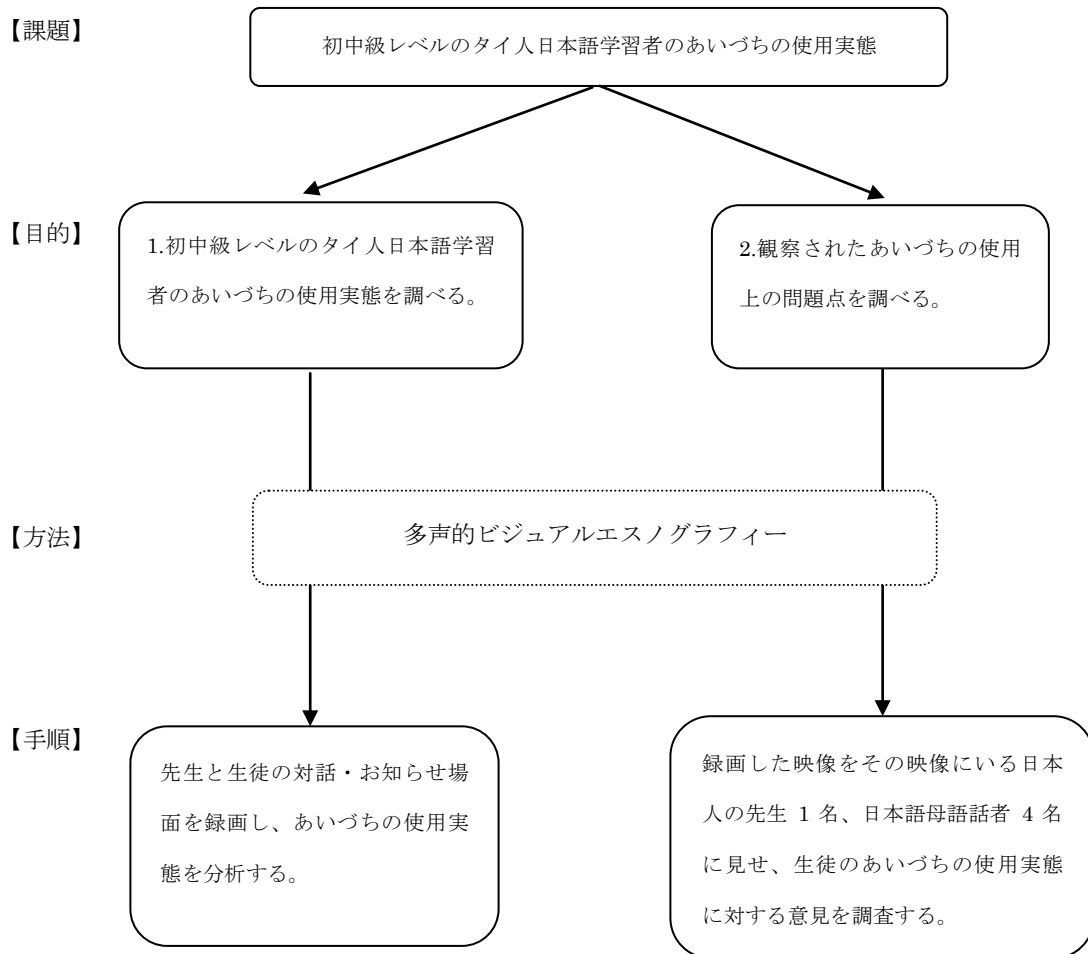


図2 課題、目的、方法、手順

本章の構成は、3.1で1つ目の調査目的の方法について、3.2で2つ目の調査目的の方法について述べる。研究方法は、「多声的ビジュアルエスノグラフィー」により行う。

「多声的ビジュアルエスノグラフィー」とは、「ビデオ」という映像による記録をもとに分析・考察を進めていく研究方法である。本研究の場合、「あいづち」の使用実態とその問題点を調査することが目的である。そのため、映像による記録は、生徒の「言語によるあいづち行動」だけでなく、「非言語によるあいづち行動」も観察することができる。また、録画した映像を他者に見せ、多くの意見を引き出すことで、それを分析・考察に反映させることができる。これを「多声的」といい、これが「多声的ビジュアルエスノグラフィー」の利点である（野口 2007 : 296-297 参照）。

研究手順は、まず 1 つ目の目的の調査として、日本人教師と生徒との対話をビデオ録画し、あいづちの使用実態を調査する。次に 2 つ目の目的の調査として、録画した映像を、実験協力者の日本人教師と、日本語教師経験のある日本語母語話者 3 名、計 4 名に見せ、初中級レベルのタイ人日本語学習者のあいづちの使用に対する「声」を収集する。調査は、2012 年 12 月から 2013 年 1 月までに行う。

本研究の調査対象者は、タイ・バンコクの C 高校の 3 年生 11 名である。生徒は全員タイ語母語話者で日本語能力試験 N5 から N3 レベルである。11 名の内訳は、女子生徒（以下「SF」とする）10 名、男子生徒（以下「SM」とする）1 名である。

### 3.1 目的 1：あいづちの使用実態の実験

調査は 2012 年 12 月に行った。実験に際し、生徒は 3 グループに分けた。生徒には試験の後の空いている時間に来てもらい、実験に協力してもらった。

録画時間は、1 グループ約 20 分、合計約 60 分間録画した。録画時の教師（実験協力者）・生徒・カメラ・観察者（筆者）の位置は図 3 の通りである。

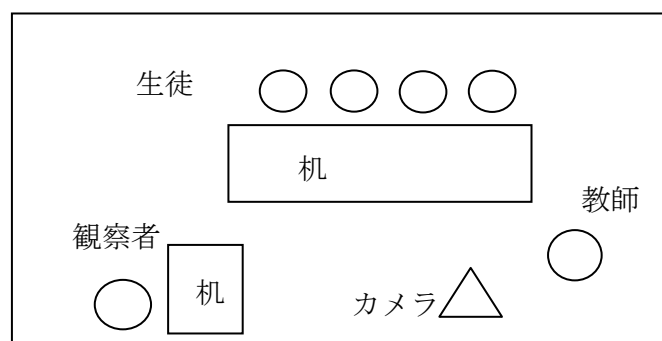


図 3 録画場面の見取り図

本研究における「あいづち」の使用実態調査では、「お知らせのときのあいづち」場面を実験場面として設定した。これは、「日本人教師が生徒に、日本語のクイズ



について知らせる」場面である。録画は 3 つの部分で構成した。1. 「ウォーミングアップ」、2. 「お知らせ」、3. 「質問」である。まず、最初の 5 分間で「ウォーミングアップ」をした。これは、生徒の緊張を減らすため、協力者の日本人教師に生徒といつものような会話をしてもらった。次の 10 分間は本題の「お知らせ」である。教師が日本語クイズのお知らせの情報を生徒に伝えた。最後の約 5 分間は「質問」の時間をとった。これは、「お知らせ」について何か質問があるかを確認する時間である。なお、全てのグループに同じ内容を伝えるため、筆者は会話を行う前に図 4 の「日本語クイズのお知らせ」のメモを、協力者の日本人教師に渡した。

日本語クイズのお知らせ	2012 年 2 月 2 日 (土)
<ul style="list-style-type: none"><li>• 2 人のチーム</li><li>• 申込み方：①申込書②学生証明のコピー (1 月 20 日までに)</li><li>• 2 ラウンドある。①絵を見て平仮名か漢字で言葉を書く。(20 問：1 問につき 30 秒) 最後の 4 チームを選ぶ。</li><li>②タイ語の単語を見て平仮名か漢字で日本語に訳す。(20 問：1 問につき 30 秒)</li></ul> <p>*注意：「文」を書くのではなく、「単語」を書く。きれいに書く。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 優勝したら、1 位は 3000 バーツ、2 位は 2000 バーツもらえる。</li><li>• 自分で行くか学校のバスで行くか連絡してほしい。</li></ul>	

図 4 タイ語に翻訳し協力者の先生に渡したメモ

実験後、まず筆者が録画した映像を視聴した。しかし、録画した映像からは、本題の「お知らせ」のときにはあいづちがほとんど観察されず、最初の「ウォーミングアップ」と最後の「質問」の部分であいづちが観察されることが分かった。そのため本研究では、当初計画していた本題の「お知らせ」部分ではなく、「ウォーミングアップ」と「質問」の録画部分に焦点を当て、その使い方を分析することとした。

録画後、データを文字化した。文字化の方法は、ザトラウスキー (2001) を参考に行った。なお本研究では、「音声を伴う笑い」も取り上げた。しかし、ザトラウスキー (2001) では、「笑い」は非言語的な行動として扱われているため、ザトラウスキー (2001) の文字化ルールに加え、本研究で取り上げる「音声を伴う笑い」については「(笑い)」という記号で付け加えた。以下に文字化ルールの具体的な記号を示す。

//	//の後の発話の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。
ー	前の音節が長く延ばされていることを示す。
↑	疑問ではなく、上昇のイントネーションを示す。
。	下降イントネーションで文が終了することを示す。
、	短い沈黙、文が続く可能性がある場合を示す。
{ }	{ } 中の行動は非言語的な行動
[ ]	はっきり聞こえない発話を示す。 (ザトラウスキー2001 : 59-60)
(笑い)	笑いのあいづちを示す。(本研究の追加条項)

文字化の一例を挙げる。「笑い」のあいづちの例は、19 SF4 にみられる。

- (1) 1 T どこへ行ってたんですか。  
2 SF4 は↑  
3 T どこへ行ってきたんですか。山↑頭が[...]  
4 SF4 いいえ、ファッションです。  
5 T あ、ファッションですか。  
6 SF4 はい。  
7 T いいですね。  
8 SF4 はい。{うなずき}  
9 T テストはどうでしたか。今日は、日本語のテストは↑  
10 SF9 まーまー。  
11 SF4 しました。  
12 SF10 難しかったです。  
13 SF4 しましたです。  
14 T しました。  
15 SF4 はい。  
16 T テストどうでした？しました。  
17 SF4 はい。  
18 T どうでしたか。難しかったですか、簡単でしたか。  
どうで//したか。  
19 SF4 // (笑い)

また、タイ語の発話の文字化については、カノックワン・富岡（2011）を参考に行った。タイ語の文章の下には翻訳した日本語の意味を記す。一例を挙げる。

- (2) 1 T 何ですか。  
 2 SF2 いちきゅういち。  
 3 SF1 警察官  
 4 SF2 ?âw mây chây rǔw káw bǔok pay bəə diaw kan  
 (=エ↑そうじゃないの↑同じ番号っていったけど)

### 3.2 目的2：あいづちの使用上の問題

研究方法は「多声的ビジュアルエスノグラフィー」である。録画した映像は、2012年1月に4名の日本語母語話者に見せ、それぞれにコメントを書いてもらった。1名は実験協力者で、他の3名は、現在タイで日本語を教えている、もしくは教えた経験がある日本語母語話者である。4名の日本語母語話者の背景は次の表5の通りである。

表4 多声的意見の協力者である日本語母語話者の背景

日本語母語話者	性別	年代	本研究の対象者との関係	タイ滞在歴
J1	男	40代	実験協力者。生徒に3年間教えている。	10年
J2	女	60代	なし	1年4ヵ月
J3	男	40代	なし	11年
J4	女	30代	なし	7年6ヵ月

質問項目は3つである。1つ目の質問は、生徒の反応についてである。例えば、良い聞き手かどうか、失礼なところがあるかどうかについてである。2つ目の質問は、発話されたあいづちに関する問題についてである。例えば、使用された「あいづち」の中で問題となりそうなものや、分からない意味のものがあるかどうかについてである。3つ目は、その他何でも気がついたことについてである。コメントはメールで送信してもらった。コメントの中でさらに詳しく聞きたい場合や確認したい回答については、回答者に再度メールで連絡し、意見を求めた。

データ整理の手順は、まず「全体的な反応」、「笑いのあいづち」、「言語のあいづち」、「非言語のあいづち」という見出しをつけ、それに沿ってそれぞれのコメントを分類した。次に、4名の中での相違点に着目し、なぜ違っているかについて検討した。

第 4 章では、以上の手順により進めた調査結果を提示した上で、初中級レベルのタイ人日本語学習者のあいづちの使用実態を考察する。

## 第4章 結果と考察

マラシー（1988）は、タイ人の会話における行動には次のような特徴があると指摘している。

タイ人は会話を交わす時に、相手は目上の者であろうと目下の者であろうと、普通目を合わせる。目をそらしたり、相手の体をジロジロと見たりするのは不審な、疑わしい、失礼な、信用できない態度だと思われる。目を合わせることは話し手の誠意を表すし、相手の話に対して熱心に聴いているということも示す。

（マラシー1988：25）

すなわち、聞いている時、ほとんどあいづちを使用せず、目を合わせて聞くことが、タイ人にとっての誠実な聞き方であるということである。しかし、こうしたタイ人の会話スタイルは、あいづちを多く打つ会話スタイルの日本人にとって、感じが悪いという印象につながってしまう可能性を示唆している。

### 4.1 タイ人学習者のあいづち

4.1 では、本研究における実験調査で観察された日本語初中級レベルの学習者のあいづちの使用傾向を提示する。まずは図 5 に、本調査で観察されたあいづちを分類した結果を示す。

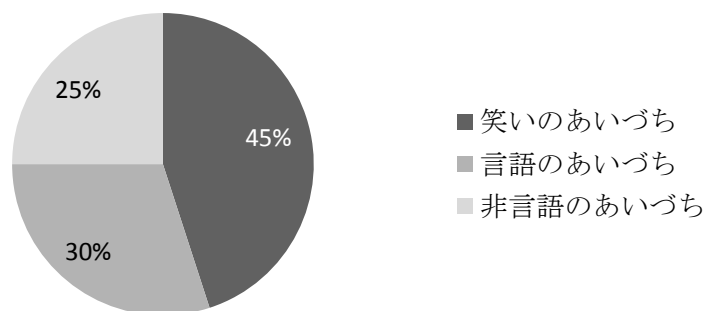


図 5 初中級レベルのタイ人学習者に観察されたあいづち  
(小数点以下切り捨て)

本調査で一番多かったあいづちは「笑いのあいづち」で 45%、次が「言語のあいづち」で 30%、3 番目が「非言語行動のあいづち」で 25%であった。

Wannaruk (1997) は、タイ人とアメリカ人の電話の会話で観察されたあいづちを調査し、あいづちの種類について以下のように述べている。

Interestingly, for both Thais and Americans the ranking of types of back channels with respect to frequency was the same. The overwhelming majority of back channels in both languages fell within the sort utterance category. The second and third most used categories were laughter and short questions. Brief restatements and sentence completions were the fourth and last choices, respectively. (Wannaruk1997 : 171)

Wannaruk (1997) の調査結果は、本研究結果と似ているが、違っているところもある。それは、本研究結果では言語のあいづちが一番多かったのではなく、笑いのあいづちが一番多かった点である。Wannaruk (1997) の調査対象者は大学生で、本研究の調査対象者は高校生である。また、Wannaruk (1997) では電話の会話を対象としているのに対し、本研究では対面式会話である。こうした違いが、調査結果に違いをもたらしているものと考えられる。

では、タイ人学習者が使用したあいづちが、日本人にとってどうか、その印象について聞き取り調査した結果を提示する。まず録画した映像を日本語母語話者 4 名に見せ、その後「生徒の反応はどうだったか？」と質問した。以下が意見である。

表 5 タイ人学習者のあいづちに対する日本語母語話者の印象

協力者	「生徒の反応はどうだったか？」
J1	あいづちが少ない。聞いているときは本当に動かないですずっと聞いている。
J2	あいづちと言えるような反応は、ほとんどしていない。うなづく学生は案外に多かった。
J3	全体的にあいづちが少ないですね。不自然なところが 2 つあって、1 つ目は「なににしてください」って言ったときに何も反応しないときに不自然に感じます。それから 2 つ目は「なにににですか」って象徴上？何も声を出さないだけじゃなくて、首も横にも振らないととても不自然に感じます。日本人は、何も反応がないことに慣れていません。わからなかったけど、わかりたいときは、首をななめにしたりすると思います。
J4	全体的にあまりあいづちを打っていないという印象を受けました。日本語のあいづちがあまり見られなかっただけで、タイ語でのあいづちは使っていると感じました。

以上の日本語母語話者からのコメントから、協力者の日本人全員が一致して指摘していることは、タイ人学習者のあいづちが少ないという印象である。

つまり、タイ人日本語学習者はあいづちをもっと使うことで、自然な日本語にもなり、日本人との会話がスムーズに進むようにもなるという示唆である。池上・守屋（2009）は、日本語の会話でのあいづちの大切さについて次のように述べている。

あいづちは日本語の会話において共同主観的な関係を確認、維持する上で重要な機能を果たしていますが、このことは、けんかなどをして相手があいづちを打ってくれないと、会話の統行が苦しくなることや、逆に聞き上手という人が上手にあいづちを打ってくれると、話し手は話が進めやすくなり、しかもよく注意して自分の話を聞いてくれたと感じることからもわかります。（池上・守屋 2009：150）

しかし、池上・守屋（2009）は、やたらとあいづちを打つことや、多く使ったりすることがいいわけではなく、適切に話し手の呼気に合わせあいづちを打つことが大切であるとも述べている。

あいづちは話し手の文の切れ目に打つものです。つまり相手の呼気を合わせて、こちらも「ええ／そうそう／はい」と呼気を合わせるわけで、いわば共同主観に合わせ、場の共有を確認する行為だと考えられます。あいづちを打ち過ぎると、かえって会話がスムーズにならないのはそのためです。こうしたあいづちが多いとは、いかにも日本語らしい現象と言えるでしょう。（池上・守屋 2009：150）

池上・守屋（2009）の記述から、日本語の会話では、適切にあいづちを打つことがいかに重要であるかが示唆されている。しかし、本調査で最も多かったあいづちは「笑いのあいづち」であった。そこで 4.2 では、タイ人学習者の「笑いのあいづち」にどのような意味があるのかを考察する。

## 4.2 タイ人学習者の笑いのあいづち

図5に示したように、初中級レベルのタイ人学習者のあいづちは「笑いのあいづち」が一番多く、全体の45%であった。この結果は、日本人教師との会話の内容がおもしろくて笑った可能性もある。しかし、生徒の「笑い」にはそれだけではなく、それ以外にも様々な意味が含まれていた。

郡(1985)は「笑い」について以下のように定義している。

「笑い」は、滑稽なことやおもしろいことを見たり聞いたり考えたりした時に現れる他、話し相手との心理関係を調節しようとする際にも現れる。また、笑いは一面では生理現象であり、感情表出であり、一面ではコミュニケーションの一形態である。(郡 1985 : 129)

郡(1985)は、「笑い」は、おもしろくて笑うだけでなく、何か理由があって笑う場合もあると説明している。群(1985)は、笑いが「一面ではコミュニケーションの一形態である」と述べている。また、「笑い方」の文化差についてもコミュニケーションの1つとして考えることが重要な視点であると述べている。そこで、本研究では、あいづちの実験調査で学習者に最も多く観察された「音声を伴う笑い」が、タイ人のコミュニケーションの一形態であると仮説し、分析する。

まず、群(1985)を援用し、本調査で観察された「笑いのあいづち」を分類した。その結果、5種類の「笑い」があることが分かった。5種類の「笑い」について、以下に説明と例を挙げる。

① **笑い**：滑稽なことやおもしろいことを見たり聞いたり考えたりした時に現れる笑い。

【場面】「お知らせ」の時に、優勝者は3,000パーツもらうという話をした場面で、生徒(SF8)が「3,000パーツだけか、30,000パーツだと思ってたんだけど」と冗談を言って笑った。

- |       |     |   |
|-------|-----|---|
| (3) 1 | T   | 一番の人は3,000パーツです。                                |
| 2     | SF8 | うん。hǔu nuukwàa sǎm mùuun<br>(=30,000パーツだと思ったのに) |
| 3     | SF5 | 3,000 だけ↑                                       |
| 4     | S&T | (笑い) 。 ..... 【笑い】                               |





⑤ **驚き笑い**：聞いたことに対して驚いたり信じられない時に現れる笑い。

【場面】「ウォーミングアップ」で先生が生徒に「何のテストをしたか」について質問した時に、高校 3 年生の生徒は保健体育の言葉をどうしても思い出せず、周りにいた高校 1 年生の生徒 (M4) に聞いた場面で、後輩の高校 1 年生が「保健体育」と答えられたことに、高校 3 年生の生徒が驚いて笑った。

(7) 1 SF7&SF8 sukkasuksaaphaasāyîpùn kuuaray?ā?

(=ほけんたいいくって日本語で何?)

2 M4 保健体育 pā? ka?

(=保健体育でしょ?)

3 SF7 hōhōhōhōhō

4 SF6 (笑い)。//?iik thii dí?iik thii dí..... 【驚き】

(=もう一度、もう一度)

5 SF7 //arayna? ?āwmày ?āwmày

(=え?なにになに?もう一度)

6 M4 保健体育

本調査では、以上の 5 種類の「笑い」がタイ人学習者に観察された。それぞれの「笑いのあいづち」の種類と使用頻度の集計結果を表 6 に示す。

表 6 タイ人学習者の笑いのあいづちの種類と使用頻度

(小数点以下切り捨て)

使用順位	笑いの種類	使用回数	45%中	(100%中)
1	笑い	102	22%	(49%)
2	不安な笑い	81	17%	(38%)
3	肯定+笑い	16	3%	(8%)
4	否定+笑い	7	2%	(3%)
5	驚き笑い	5	1%	(12%)
合計	5種類	211回	45%	(100%)

表 6 より、学習者に観察された「笑い」は、おもしろくて笑う①の「笑い」が 102 回 (49%) で最も多く、次が②の「不安な笑い」で 81 回 (38%) であった。そして 3 番目が「肯定+笑い」で 16 回 (8%)、4 番目が「否定+笑い」で 7 回 (3%)、5 番目が「驚き笑い」で 5 回 (2%) であった。この結果から、最も多かった「笑い」は、おもしろい時に現れる「笑い」で、全体の 49%を占めていた。しかし、この種

の「笑い」は一般的な「笑い」を表すものであるため、本研究では取り上げない。本研究で着目するのは、一般的な「笑い」の概念から外れる使用順位 2 位の「不安な笑い」、3 位の「肯定+笑い」、4 位の「否定+笑い」、5 位の「驚き笑い」である。

そこで、こうした「笑い」について、「なぜ多く笑いましたか」とまず生徒にインタビューしてみた。生徒の答えは、「会話が静かにならないように笑った」「何を言ったらいいか分からなくて笑った」「緊張して笑った」「分からない」であった。

次に、生徒が使用した「笑い」について、日本語母語話者に聞き取り調査した。表 7 がその結果である。

表 7 タイ人学習者の笑いに対する日本語母語話者の印象

協力者	「生徒の笑いはどうだったか？」
J1	日本人の「聞いています」というサインのあいづちはあまりなく、その代わりに笑うことが多い。
J2	3 年生の女子生徒だけのグループで、日本人の目で見ると「笑いでごまかす」という場面が多かった。彼女たちの態度は、教師に対しては不適切であり、日本人教師には若干の不快感を与えらると思う。「はい」とは言えないというサイン、質問に答えられないというサイン不都合をごまかすなどの場合の「笑い」の使い方である。
J3	子どもなので、自分の世界の中で、いろいろなことを考えながら笑っているんだと思います。赤ちゃんが笑うみたいに。
J4	10 代の女の子たちは日本人もあんな感じで笑うと思います。特別嫌な感じはしません。

以上のコメントから、タイ人学習者の「笑い」は「おもしろい」という信号としてではなく、「笑いでごまかす」という印象を持たれることが分かった。一方、10 代の日本人の女の子も同じような感じで笑うという点から、「問題ないだろう」という意見もあった。しかし、タイ人のこうした「笑いのあいづち」は、日本語母語話者にとっては、「笑いでごまかしている」といった印象につながってしまう可能性が少なからずある。特に、「笑いのあいづち」は「教師に対しては不適切」という意見もあった。

八代・世良（2010）は、タイ人が感謝の気持ちや丁寧さを表すときに笑っているが、日本人にとっては深刻な場面で笑うと、「聞いていない」という印象を与えてしまう可能性がある、次のように指摘している。

ベトナムやタイでは感謝の気持ちや、丁寧な態度で話を聞いているということを見せる意味で笑顔で浮かべると言われています。しかし、この場合、教師の側には、神妙な顔つきでない＝深刻に話を聞いていない、ととらえられてしまったのです。

(八代・世良 2010:110)

しかし、今回の調査では4名中3名は、「子どもなので」「10代の女の子たち」という理由で、使っても許されるという意見であった。本調査で観察されたタイ人学習者の「笑い」は、おもしろくて笑うだけでなく、「会話が静かにならないように笑った」「何を言ったらいいか分からなくて笑った」「緊張して笑った」ものであった。そして、生徒たちのインタビューから、彼らの笑いは、実は、会話をスムーズに進ませようとする「配慮の笑い」であることが分かった。

Wannaruk (1997) は、タイ人とアメリカ人の電話の会話で観察された「笑い」について、次のように記している。

When a speaker laughs, it means that s/he understands the message and signals his/her personal response as well. Laughter is also used to build rapport during the interaction. Laughter between two can indicate a dyadic bond. Failure to respond to a speaker's utterance or laughter can be considered a lack of attention or disagreement. (Wannaruk1997:171)

Wannaruk (1997) は、「笑いのあいづち」は理解信号や感情表出を表す反応であり、そのやりとりの中で関係を構築するためにも使用されると説明している。本調査で観察された笑いも、生徒たちのインタビューから、Wannaruk (1997) の説明にあるように「ちゃんと聞いている」「反対していない」といった聞き手としての協調的な態度を表しているものであった。こうした点で、Wannaruk のいう笑いのあいづちを実証している。

ホームズ&タントンタウィー (2000) は、タイ人は何かを伝えるときに、言葉以外の方法を使うと述べている。

タイで人々が交わすメッセージは、多くの西欧会社と比較すると、はるかに言葉以外の方法で伝えられる。それどころかもっとも重要なメッセージ、例えばある種の同意、親愛、不快、感謝、謝罪、意見の不一致、ある場合には、怒りといった感情さえ、言葉以外で伝えられる。しかしこのことは、彼らが自分がどう感じているかを口に出さないだけであって、感情を表そうとしていないことを意味するのではない。メッセージはしばしば「口元」を見れば分かるのである。(ホームズ&タントンタウィー2000:54)

つまり、タイ人は気持ちを相手に伝えるとき、言葉で伝えるのではなく、ほほえみや笑いや非言語行動などをよく使用するということである。そのため、言語のあいづちだけを調査した場合には、「ほとんど使われない」という結果となってしまう可能性がある。しかし、本研究では、笑いのあいづちについてもあいづちの一形態として検討した結果、タイ人にとっての「笑い」が相手との調和を保とうとする・協調しようとする1つのコミュニケーションの形であるということが改めて明らかになった。このことは、ホームズ&タントンタウィー(2000:54)の、「緊張をときほぐし、人間関係を保ち、社会的調和に頼ることで、ものごとをうまくまとめていこうとする行動様式である」という指摘をまさに裏付けている。ホームズ&タントンタウィー(2000)によれば、タイ人は、「不愉快な、または困った状況」のもとでもほほえむということが指摘されている。また、前述した生徒の意見からも、「笑い」が生徒たちなりの「配慮の表れ」であったことは明らかである。こうした点から、タイ人にとっての「笑いのあいづち」は、会話をスムーズに進ませようとする話し手に対する聞き手の協調的行動であるといえる。

Iwasaki&Horie(1998)では、タイ人の会話スタイルは「自己主張型」と分析されているが、本調査結果のように、「笑い」をあいづちの一形態と捉えた場合には、タイ人は聞き手として「協調的」とあるという特徴が明らかになった。

しかし、言葉以外で気持ちを伝えるのは、だれに対しても・どんな場面にでも使えるものではない。特に、タイ文化が分からない外国人に対しては、ホームズ&タントンタウィー(2000)が指摘しているように、笑いが不適切な印象につながる場合もある。例えば、深刻な場面でのタイ人の「ほほえみ」は、外国人を不愉快にさせるため、深刻な場面では深刻な表情の方が外国人には納得できると、ホームズ&タントンタウィー(2000)は指摘している。そのため、こうしたタイ人のコミュニケーションの仕方については、日本語教育においても留意しておく必要がある。

本研究のように、高校生の場合には多少笑っても許されるのであろう。しかし、そのままずっと許されるというわけではないため、本研究では、早い段階から「笑いのあいづち」も含め、タイ語と日本語の会話スタイルの違いについて教えていく必要があると考える。

### 4.3 タイ人学習者の言語のあいづち

「言語のあいづち」は、あいづち全体の 30%であった。これらをさらに分類すると、「日本語のあいづち」(85 回、18%)と「タイ語のあいづち」(55 回、12%)に分けられた。なお、「言語のあいづち」の中で、「日本語のあいづち」として使用されているのか、「タイ語のあいづち」として使用されているのかが明らかでないものについては、それを使用した生徒に確認した。確認の結果、それらは全て「タイ語のあいづち」であることが分かった。そこで 4.3.1 では「日本語のあいづち」の使用実態と使用上の問題について、4.3.2 では「タイ語のあいづち」の使用実態と使用上の問題について取り上げ、考察する。

#### 4.3.1 タイ人学習者の日本語のあいづち

表 8 は、出現した「日本語のあいづち」の使用実態と使用頻度である。

表 8 タイ人学習者に観察された日本語のあいづちと使用頻度  
(小数点以下切り捨て)

使用順位	表現	使用回数	18%中	(100%中)
1	ハイ	35	8%	(41%)
2	へー↑	21	5%	(25%)
3	エ↑	10	2%	(12%)
4	エー↑	6	1%	(7%)
5	イイエ	4	1%	(5%)
5	ウン	4	1%	(5%)
7	ア、ハイ	1	0%	(1%)
7	ハイ、ソウデス	1	0%	(1%)
7	ヒドイ	1	0%	(1%)
7	ハイ↑	1	0%	(1%)
7	イヤ	1	0%	(1%)
合計	11 種類	85 回	18%	(100%)

日本語のあいづち表現は 11 種類であった。中でも最も多かったのが「ハイ」で 35 回 (41%)、次が「へー↑」で 21 回 (25%)、3 番目が「エ↑」で 10 回 (12%) で

あった。他、「エー↑」が6回(7%)、「イイエ」「ウン」が4回(5%)、「ア、ハイ」「ハイ、ソウデス」「ヒドイ」「ハイ↑」「イヤ」がそれぞれ1回(1%)であった。

生徒が発話した日本語のあいづちの中で、「へー↑」と「エー↑」については、間違っ  
て使っているという指摘があった。それはJ2、J3のコメントで指摘されている。

表9 タイ人学習者の日本語のあいづちに対する日本語母語話者の印象

協力者	「へー↑」と「エー↑」の問題
J1	なし
J2	先生に対して発言するのは不適切な「えーっ」の使用が多いが、先生をよく注視している ので、失礼な印象を免れている。先生への反応として「えーっ(ア)」は本来適切ではないが、 親近感が高ければ許される反応だと思う。
J3	「自動車のテストは難しいですか」という質問なんですよ。そのときにこの人は「へえ↑」 というんですね。この子は「あー」と言ってると思うんです。この子の分からないときの 「えー↑」っていうのをちょっと気になりますね。「えー↑」っていうふうには、聞き返さ ない。「すみません」とか「何ですか」とか聞きかえすから、「えー↑」っていうとちょ っと友だちみたいで、ちょっと気になりますね。多すぎますかっていうのに対してこの子 は多すぎます。分からないときは全て「えー↑」って言えばいいと思ってるけど、それ は先生に対しては失礼なときがあると思います。
J4	先生の「平仮名か漢字で…」の質問に対し「ええ?…難しそうですね」と言っ て良かった。

2名の日本語母語話者のコメントからは、生徒の「へー↑」「エー↑」の使い方について「適切ではない」「先生に対しては失礼なときがある」という意見が出された。

大浜(2002)は、年上の相手と同年の相手に対する日本語のあいづちの使い方について、次のような結果を示している。

年上の相手と同年の相手で、使用される相づち表現に違いが見られた。対年上には相手の発話を重視し、賛同する表現(あ系、そう系、本当系)が多く使用され、対同年では違和感を表明し自らのターン取得をシグナルする「え系」が多く使用された。また年上には丁寧な「はい系」が多く同年にはくだけた「うん系」が多く使用された。

(大浜 2002 : 8)

大浜(2002)の調査結果から、先生や目上に対しては「へー↑」「エー↑」を使わない方がよいことが分かる。

しかし、これについては「親近感が高ければ許される反応」という見方もあった。それが、次の例(8)である。生徒 (SM1) は、教師の質問を聞いても分からず、「エー↑」を使用している。

- (8) 1 T           だれと一緒に乗りましたか。  
2 SM1           エー↑ ..... 【エー↑】  
3 T           だれか一緒に、両親か  
4 SM1           [両親kuuu ?aray] すみません。先生と乗りました。  
                  (= 「両親」とは何?)

こうした「へー↑」や「エー↑」の使用について、これらのあいづちを多く使用していた生徒は、アニメやドラマをよく見ている男子生徒であった。日本のアニメやドラマが数多く放送されているタイでは、日本語を勉強しようと思ったきっかけが、アニメやドラマの影響である場合が少なくない。そのため、こうした「へー↑」や「エー↑」の使用については、その影響力を考え、授業で積極的に取り上げていく必要があると考える。



#### 4.3.2 タイ人学習者のタイ語のあいづち

言語のあいづちでは、日本語のあいづち以外にタイ語のあいづちも 12%観察された。表 10 は、出現したタイ語のあいづちの使用実態と使用頻度である。

表 10 タイ人学習者に観察されたタイ語のあいづちと使用頻度  
(小数点以下切り捨て)

使用順位	表現	日本語に近い あいづち	回数	12%中 (100%中)
1	อ้อ (ʔǎw)	×	7	2.0% (13%)
1	โห (hoo)	○	7	2.0% (13%)
3	เอ๋ม (ʔǎm)	×	5	1.0% (9%)
4	ฮะ (haʔ)	○	4	1.0% (7%)
4	เออ (ʔǎw)	×	4	1.0% (7%)
4	ไม่ใช่ (mâychây)	×	4	1.0% (7%)
7	ฮึ (huʔ)	○	3	1.0% (5%)
7	อืม (ʔum)	○	3	1.0% (5%)
7	เอ๋ม (ʔǎm)	×	3	1.0% (4%)
10	อ้าว (ʔǎaw)	×	2	0.5% (4%)
11	เฮ้อ (huúu)	×	2	0.5% (4%)
12	ใช่ (chây)	×	1	0.0% (2%)
13	อื้อ (ʔúu)	×	1	0.0% (2%)
14	เฮ้ย (hǎy)	×	1	0.0% (2%)
15	เย้อ (yǎw)	×	1	0.0% (2%)
16	หุ (hú)	×	1	0.0% (2%)
17	โธ (ʔó)	×	1	0.0% (2%)
18	เอาะ (ʔwʔ)	×	1	0.0% (2%)
19	โธ๊ะ (ʔóʔ)	×	1	0.0% (2%)
20	เฮ้อ (hǎw)	×	1	0.0% (2%)
21	อา (ʔaa)	○	1	0.0% (2%)
22	โหย (hǎy)	×	1	0.0% (2%)
合計	22 種類	○=5 ×=17	55	12% (100%)

○はタイ語の日本語に近いあいづち、×はタイ語にしかないあいづち

タイ語のあいづち表現は、22 種類観察された。最も多く使用されていたあいづちは“อ้อ” (ʔǎw) と“โห” (hoo) で、それぞれ全体の 13%であった。表 10 の中で日本語に近いあいづちは 5 つで、使用順位が 1 位の“โห” (hoo)、4 位の“ฮะ” (haʔ)、7 位の“ฮึ” (huʔ)、同じく 7 位の“อืม” (ʔum)、21 位の“อา” (ʔaa) であった。そこで、これらのタイ語のあいづちが、日本語母語話者にとって「どういふ印象か」と質問した。結果は表 11 である。

表 11 タイ人学習者のタイ語のあいづちに対する日本語母語話者の印象

協力者	「タイ語のあいづちにどのような印象を持つか？」
J1	日本語にない母音のあいづちを使わない方がいいと思います。
J2	聞き手の感情の表現で、話手に対して発信しているようには見えませんでした。
J3	先生の質問は「どこが難しかったですか？」。意味がわからなかったみたいで、「あー」と答える。日本語では、ちょっと失礼。すぐに役立つコツとして学生に伝えたいことは、わからなかったときに、「はー」とか「あー」とか言わないことです。首をちょっとななめにするだけでも、わかっていないことがわかります。「はー」とか「あー」は、日本語では違う場面に使うので、気になるんだと思います。
J4	全体的にあまりあいづちを打っていないという印象を受けました。日本語のあいづちがあまり見られなかっただけで、タイ語でのあいづちは使っていると感じました。

以上のコメントから、日本人と話す時には、「タイ語のあいづちを使わない方がいい」ことが示唆される。日本人にとって「タイ語のあいづち」は、「あいづちを打っていない」「話し手に対して発信しているようには見えない」という印象にうつることが分かった。つまり、タイ語のあいづちは、あいづちを打っている反応としては解釈されず、何も反応してないようになってしまうということである。

また、タイ語のあいづちの中には、良くない印象を与えるあいづちもあった。それは、タイ語にしかないあいづちの“๒๐” (ʔəə) と、日本語に近いタイ語のあいづちの“๒๑” (hǎʔ) と“ໂห” (hoo) であった。まず“๒๐” (ʔəə) から取り上げる。

タイ人は、“๒๐” (ʔəə) を 2 つの意味で使っている。1 つ目は「考えているところ」や「言いにくいんだけど」という意味、2 つ目は「分かったよ」や「そうだよ」という意味である。1 つ目の意味での使用は、上下関係や親疎関係に関係なく、だれにでも使える。一方、2 つ目の意味での使用は、親しい人にしか使えない。しかし、これを実際に日本語の会話で使ってしまうと、以下の例(9)のようになり、いずれの意味であっても悪い印象を与えてしまう。

- (9) 1 SF8 うんどう・・・のテスト。  
 2 T それは何というんですかね。  
 3 SF6 ʔəə..... 【๒๐ (ʔəə)】

(9)の例は、生徒が今日のテストについて話している場面で、SF6) が「保健体育」の言葉を思い出せず“๒๐” (ʔəə) を使い、「考えているところ」という意味を日本人教師に伝えている。しかし、このような“๒๐” (ʔəə) の使用に対し、日本語母語話者からは次の表 12 のようなコメントが得られた。

表 12 タイ人学習者のタイ語のあいづち“๑๐๐” (๑๐๐) に対する  
日本語母語話者の印象

協力者	“๑๐๐” (๑๐๐) の問題
J1	気が入っていない、集中していないという感じがする。なので、“๑๐๐”という音を聞くと、その音を発している人に対して『この人は大丈夫かな』という決してプラスではない印象を持つ。なので、本人はまじめなのに、なんかかわいそう。長く教えて分かるけど、初めてあった人はわからないでしょう。
J2	日本人にとっては“๑๐๐”は分かりにくい音です ๑๐๐ は、話を聞いていないという印象ではありません。口ごもっている（何かを言いたいんだけど、うまく言えない）という印象なんです、日本人からすると、その音が不満があるようなニュアンスに聞こえるのです。だから、そういう形で不満の表明を目上の人にするのは、失礼に当たるといわけです。
J3	“๑๐๐”は、「えーっと」ですね。これも上と同じように、タイ語に switch しているのがわかりやすいので、気になりません。日本語に似た音の相づちが無い（または使う機会がとても少ない）からかもしれません。
J4	タイ語で反応しているように聞こえる。日本語だったら「えーっと」や「んー」と言うと思います。

1 つ目は、“๑๐๐” (๑๐๐) の「๑」というタイ語のあいづちの母音の問題である。これは日本語の「ア」と「ウ」の間の母音で発音されるため、日本語にはない発音のあいづちである。図 6 の○が (๑) の母音である。

そもそも日本語とタイ語の母音には大きな違いがある。日本語の母音は「ア (a)」「イ (i)」「ウ (u)」「エ (e)」「オ (o)」の 5 種類で、前舌と奥舌で発音されるのに対し、タイ語の母音は短母音・長母音合わせて 32 種類で、前舌・中舌・奥舌で発音される。図 6 は□が日本語の母音で、○がタイ語の「๑」の母音である。

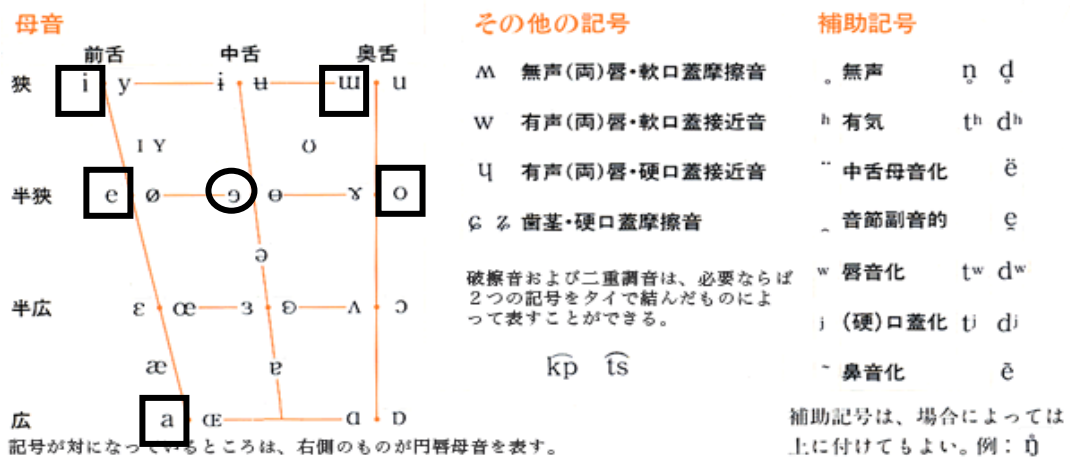


図 6 日本語にないタイ語の“๑๐๐” (๑) の母音

(<http://daijirin.dual-d.net/extra/nihongoon.html> : 2013/2/6)

今回問題となったタイ語のあいづち “๑๐๐” (๑) の母音は、中舌で発音される母音であるため、日本語の母音にはない。そのため、タイ語が分からない日本人が “๑๐๐” (๑๑๑) というあいづちを聞くと、「ア」か「ウ」の異音として判断される可能性がある。そしてその結果、どういうあいづちの意味なのか分からないということにつながってしまうと考えられる。

特に、タイ語が分からない日本人や、初対面や目上の人にとっては「プラスではない印象」「分かりにくい音」「不満」といったマイナスの印象を与えるあいづちであるという意見が出た。これに対し、「タイ語に switch しているのがわかりやすいので、気にならない」という意見もあった。しかし、不快感やマイナスの印象を与えないようにするには、“๑๐๐” (๑๑๑) という表現の代わりに「あー」や「えーと」などの表現を使う必要があるだろう。

次は、日本語に近いタイ語の “๑๐๑” (๑๑) という表現について検討する。タイ人は、聞き取れないとき “๑๐๑” (๑๑) を使う傾向がある。第 2 章で提示したマラシー (1988) がタイ語のあいづちの用法について述べているように、タイ語のあいづちの使い方は上下関係・年齢差だけではない。「内・外」によっても「あいづち」の形式が変わる。“๑๐๑” (๑๑) もその 1 つで、相手によってイントネーションや発音の強さや母音の長さが異なってくる。例えば、親しい人に対して、非常にびっくりして、もう一度聞きたくて聞き返すときには “๑๑๑” (๑๑๑) のように母音を伸ばすといった使い方である。しかし、日本語母語話者にとって、こうしたイントネーション・発音の強さ・母音の長さの違いを認識することは難しく、同じように認識されてしまうと推測される。それは、次の表 13 のコメントから分かる。日本母語話者のコメントからは、“๑๐๑” (๑๑) に対する印象の悪さが語られている。

表 13 タイ人学習者のタイ語のあいづち “๑๐๑” (๑๑) に対する  
日本語母語話者の印象

協力者	“๑๐๑” (๑๑) の問題
J1	けんかを売られている、気が強い、怒っていると感じます。
J2	日本人の目からは、目上の人にはふさわしくない反応です。日本人も「は？」は使いますが、ニュアンスがだいぶ違いましたね。
J3	私から見ると、ちょっと失礼に感じます。両方とも別の意味があるからです。「あー」上昇調：「オレの命令がきけないのか？あー」、「はー」上昇調：「はー、オマエ、ばかじゃねーの？」ヤクザ映画ですね。
J4	先生の発言に対し、とっさに「はあ？」と聞き返していたのはあまり良くなかった。急な反応なので、考えずに出てきてしまっただけだと思うが。

日本語に近いタイ語の“ฮ่า” (há?) は、日本語母語話者にとって「目上の人にはふさわしくない反応」「けんかを売られている」「気が強い」「怒っている」「ちょっと失礼」「先生の発言に対し良くない」といった、悪い印象を与えるあいづちであることが共通して指摘されている。本研究で観察された“ฮ่า” (há?) は、例(10)のような使用である。

- |        |     |                        |
|--------|-----|------------------------|
| (10) 1 | T   | こんにちは。                 |
| 2      | S   | こんにちは。                 |
| 3      | T   | どこへ行ってたんですか。           |
| 4      | SF4 | há?..... 【“ฮ่า” (há?)】 |
| 5      | T   | どこへ行ってきたんですか。山?頭が・・・   |

これは、日本人教師が生徒にあいさつをしてから、SF4の髪型を見て、走ってきたような感じがしたので、教師が「どこへ行ってたんですか」と聞いた場面である。緊張していたSF4は、急に質問されてびっくりしてしまったため、その質問が聞き取れず、教師に対して“ฮ่า” (há?) と聞き返した場面であった。

しかし、タイ語でよく使われるこの“ฮ่า” (há?) は、そのまま日本語の会話で使うと危険であることが、カノックワン (2012) でも指摘されている。カノックワン (2012) は、日本語が聞き取れなかったときに「え?」ではなくて「は?」と聞き返すと、「本当にそんなことをいうのかと相手を非難ながら問い返す」という意味になってしまうと指摘している。本調査結果は、カノックワン (2012) の指摘を実証するものである。

タイ人学習者は、非常に危険なニュアンスを含む“ฮ่า”の使用について理解する必要がある。そして、こうした危険を回避するために、“ฮ่า” (há?) の代わりに「何ですか」や「すみません、もう一度お願いします」という聞き返し表現を、早い段階から教えるべきである。

最後に“โห้” (hoo) について検討する。タイ人は、非常にびっくりしたときに“โห้” (hoo) を使う。これは、性別・年齢に関係なく、だれにでも使うことができるあいづちである。しかし、日本語母語話者にとっては、性別・年齢に関係なく使えるあいづちというわけではないことが、表14のコメントから分かる。

表 14 タイ人学習者のタイ語のあいづち “ໂຮ” (hǎo) に対する  
日本語母語話者の印象

協力者	“ໂຮ” (hǎo) の問題
J1	ちょっとびっくり、参考になりましたという意味。ちょっとおじさんの男性教授が使うことばだと感じる。そういう人たちが使うことばだから、使った本人のそのような印象になる。かしこそう。女の子を使ったらちょっと不自然になると思うけど、悪くはない。日本語の「ホー」は、ちょっと皮肉。例えば、「あ、そういういじわるをするんだ」感心させられたみたい。
J2	ໂຮ (ホー↑) の音は、日本人はあまり使いません。年配の人がちょっと驚いた時に使うくらいでしょうか。それも目上の人には言いません。だから、タイ人の話し方を知らない時は、ちょっとだけ失礼な感じを受けることもありました。「へえ」だとそう思わないんですけどね。でも、どんな言葉でもそうですが、どんな顔で言うか、声の感じはどうかで印象は違います。タイ人はたいてい笑顔なので、失礼な感じを受けることはそんなにはないのではないのでしょうか。
J3	年齢ですが、おとなはໂຮを使いますか？私はぜんぜん気づいていませんでした。男女でいうと、男の子に言われると、生意気(なまいき)に聞こえます。女の子は、おしゃまな感じですね。いずれも、ませた感じということですね。
J4	“ໂຮ” についてですが、イメージは「おじさんのセリフ」というかんじです。日本人は普段あまり使わないと思います。私は、時々ちょっとふざけて、「へえー」(驚き、感心)の代わりに言うことがありますが、真面目な話をしている時には言いません。タイ語を知らない日本人が聞いたら、「このタイ人はおもしろい反応するな」と感じると思います。

以上のコメントから、女子生徒が使った場合には、「おじさんのセリフ」「おもしろい反応」に聞こえることが分かった。一方、男子生徒が使った場合には、「かしこそう」に聞こえるという違いが示された。それは、日本語母語話者にとって、“ໂຮ” (hǎo) は「ちょっとおじさんの男性教授が使うことば」「年配の人がちょっと驚いた時に使う」「おじいさんのセリフ」と、年配の男性が使うあいづちの1つという印象があるため、高校生、特に女子生徒は使わない方がいいあいづちであるということが分かった。また“ໂຮ” (hǎo) は、「皮肉」「ちょっとだけ失礼」「このタイ人はおもしろい反応するな」「生意気」というようにも聞こえてしまうようである。生徒が使った“ໂຮ” (hǎo) を例(11)に示す。

- (11) 1 T            ムアントーン//ターニーはどこですか。  
       2 SF6                                      // (うなずき)  
       3 SF6            遠いです。(笑い)  
       4 T              近いですね。  
       5 SF6            hǎo..... 【 “ໂຮ” (hǎo) 】

例(11)は、日本人教師が生徒に、生徒の家はクイズを行う場所から近いかどうかについて尋ねている場面である。SF6は、自分の家はクイズを行う場所から遠いと伝えたのだが、場所を言ったものの、教師には分からず、「近いですね」と教師が返答したことから、SF6は非常にびっくりして、教師に“ໂຮ” (hǎo) と反応した場面であった。

以上の結果から、日本語の「ホー」と理解される“ໂຮ” (hǎo) は、日本語ではタイ語と違いただれにでも使えるあいづちではないため、高校生、特に若い女性は使わない方がいいことがわかった。また、目上の人に対しては使わない方がいいあいづちであることも分かった。

本節では、初中級レベルのタイ人高校生が使用した言語のあいづち表現の使用実態と問題点を考察した。タイ語のあいづちの中には、使っても問題のないあいづちと、使うと危険なあいづちがあることが明らかになった。中でも使用すると危険で問題となりやすいあいづちは、疑問があるときに使う「へー↑」「エー↑」、「聞き返し」の“ຮ” (hǎ?)、びっくりするときに使う“ໂຮ” (hǎo) というあいづちであることが明らかになった。特に、日本語に近いタイ語のあいづちの“ຮ” (hǎ?) と“ໂຮ”

(hǎo) は、タイ語の意味と違うとは知らずに使っている可能性が高いことから、注意すべきあいづちであることが示された。。

大関(2010:29)は、「自分の母語と違うところに母語知識を利用して、母語と同じように表現してしまうと、誤りになったり不自然な表現になったりしてしまいます」と指摘している。本調査で観察された日本語会話におけるタイ人学習者のあいづちの誤用には、母語であるタイ語の転移がみられた。そのため、日本語に近いタイ語のあいづちや日本語にはないタイ語のあいづちについては、使用することの危険性を教えておく必要があるだろう。日本語が上手になればなるほど、悪い印象につながる可能性があるからである。Mizutani&Mizutani(1987)が指摘していたように、日本語学習者には、早い段階から問題のあるタイ語のあいづちを教え、スムーズに口から出てくるようになるまで練習させる必要があると考える。

#### 4.4 タイ人学習者の非言語行動のあいづち

表 15 は「非言語行動のあいづち」の使用実態と使用頻度を表している。本研究における「非言語行動のあいづち」では、「うなずき」、「首を横に振る」、「お辞儀」の 3 種類が観察された。結果は以下の通りである。

表 15 タイ人学習者に観察された非言語行動のあいづちと使用頻度  
(小数点以下切り捨て)

使用順位 数	非言語行動	回数	25%中	(100%中)
1	うなずき	109	23%	(93%)
2	首を横に振る	8	2%	(7%)
3	お辞儀	1	0%	(0%)
合計	4 種類	118 回	25%	(100%)

非言語行動のあいづちの中で最も多かったのが「うなずき」で 109 回 (23%)、次が「首を横に振る」で 8 回 (2%)、そして「お辞儀」が 1 回であった。特に、1 人の生徒は、聞いている時に言語によるあいづちの代わりに「うなずき」をする傾向が顕著であった。

「首を横に振る」非言語行動は、反対の意を表す時に観察された。「お辞儀」は、お願いをされた時に観察された行動であった。それぞれの非言語行動のあいづちの例を挙げる。

A うなずき：教師が生徒に日本語クイズを行う場所について話した場面でうなずいた。

- (12) 1 T 場所は[A ホテル]  
 2 SM1 [A ホテル]  
 3 SF {うなずき} ..... 【うなずき】  
 4 T 去年は[B ホテル]です  
 5 SF1 去年漢字  
 6 S {うなずき} ..... 【うなずき】



B 首を横に振る：教師が生徒に車を運転したいかどうかを聞いた場面で首を横に振った。

- (13) 1 T 高校生はまだ運転できないの？  
2 SF1 まー、運転する人がいますど {笑い}  
3 SF3 「…」  
4 T え、皆は運転したいんですね。  
5 SM1 //イヤ {首を振る} ..... 【首を横に振る】  
6 SF3 //運転したくないです。

C お辞儀：教師が「トロフィーが欲しいから、みんなが優勝してもらってきてください」と頼んでお辞儀をしたため、それに対し生徒がお辞儀をして返した。

- (14) 1 T 優勝したら、あれ、もらってくださいね。  
2 SF9 (笑い)。  
3 T 扇風機の棚の上にありますから。  
4 SF4 (笑い)。  
5 SF9 扇風機  
6 T フリーですから。  
7 S (笑い)。  
8 T ほしいですから。ですからよろしくお願いします。 {お辞儀}  
9 SF10 {お辞儀} ..... 【お辞儀】

以上の 3 つの非言語行動の中で、「首を横に振る」と「お辞儀」の使用率は少ないため、本研究では最も多かった「うなずき」を取り上げ、聞き取り調査した。その結果、「うなずき」については、日本語母語話者全員が「良い印象」であるという意見で一致していた。そこで、「うなずきはなぜ良い印象か？」と質問した。表 16 が回答である。

表 16 タイ人学習者のうなずきのあいづちに対する日本語母語話者の印象

協力者	「うなずきはなぜ良い印象か？」
J1	SF2のうなずき方は日本人にとても近いです。友達の話に「うん、うん」とうなずいていて聞いています。
J2	SF2は、うなづくことで理解していることを相手に伝えていると思います。聞いているサインのうなづきもあるし、先生も安心して話を進めている感じがします。
J3	「場所はパテウムワンプリンセスです」というところは日本人に近いあいづちだと思います。皆「うん」でうなずいてるんです。これは普通です。
J4	SF2は、あいづちの代わりに非言語行動でカバーしているので、悪い印象を与えない。

会話の中で「うなずき」をすると、日本語母語話者にとって「日本人にとても近い」「理解していることを相手に伝えている」「悪い印象を与えない」という印象を与えることが分かった。これは、Iwasaki&Horie (2001) の日本人の会話スタイルとして記述されている「協調型」の会話スタイルを象徴するものである。表 16 から、日本人母語話者は、必ずしも言語を伴うあいづちでなくても、協調型の聞き手行動に対し、良い印象を持つことが改めて裏付けられた。

日本人母語話者の声から、日本人はうなずきをした生徒に対し良い印象を持つこと、言語によるあいづち表現ではなく、非言語行動の「うなずき」を使用しても印象が良くなることが分かった。そこで、タイ人教師は、日本人の会話スタイルが「協調型」であることを認識し、「うなずき」をあいづちの一形態と捉えておく必要があるだろう。うなずきは学習の早い段階から教えることが可能である。これは、日本語のあいづち表現をまだほとんど知らない初級レベルの段階から練習することができるものである。

以上本章では、初中級レベルのタイ人学習者が使用したあいづちの使用実態を分析し、その使用について、日本語母語話者のコメントから検討・考察した。調査の結果、初中級レベルのタイ人学習者は、あいづちをあまり使用していないことが明らかになった。調査で観察されたタイ人学習者のあいづちの中で最も多かったのは「笑いのあいづち」であった。これは、おもしろくて笑うだけではなく、タイ人の会話スタイルにおけるあいづちの一形態であることが分かった。すなわち、「笑いのあいづち」は、タイ人の聞き手行動の一形態であり、相手に対する「協調」の表し方であることが分かった。これは、Iwasaki&Horie (1998) の分析と異なる点である。つまり、タイ人の会話スタイルは、言語のあいづちは少ないが、その代わりに「笑い」をあいづちの一形態として使用し、聞き手として「協調」する態度を表していることが分かった。しかし、このような「笑い」による反応は、日本語母語話者にとっては多すぎるという印象を持たれることも示された。特に、「否定の笑い」と「ごまかし笑い」という

聞き手行動については、先生のような目上の人には使用しない方がいいと分かった。

「言語のあいづち」については、日本語のあいづちの「へー↑」、タイ語にしかない“ເອ” (ʔəə)、日本語に近いタイ語のあいづちの“ฮะ” (háʔ) と“โห” (hǒo) が問題になることが分かった。

以上の結果から示唆されることは、あいづちの学習の仕方に問題があるのではないかという点である。そこで、次の第 5 章では、本研究の結論を述べた上で、本調査結果を踏まえ、日本語教育の観点からどう解決したらいいかを提案する。

## 第5章 結論

本研究では、初中級レベルのタイ人日本語学習者のあいづちの使用実態を調査し、分析した。その結果、タイ人学習者は、言語によるあいづちの使用が少なく、笑いのあいづち使用が多いことが明らかになった。また、観察された言語のあいづちの中で、「へー↑」、「๑๐๐」(๑๐๐)、「๓๓」(hǎi?)、「ໂห»(hoo)は、日本語母語話者に悪い印象を与えることがわかった。一方、「うなずき」については良い印象を与えることが分かった。

本章では、以上の結果を踏まえ、5.1 で日本とタイの文化差とあいづちの使用実態の違い、5.2 でタイ人学習者のあいづちの使用上の問題、5.3 で中等教育でのあいづち指導への提案をし、本稿の結論とする。

### 5.1 日本とタイの文化差とあいづちの使用実態の違い

Iwasaki&Horie (1998) は、日本人の会話スタイルは「協調型」で、タイ人の会話スタイルは「自己主張型」であるため、あいづちの使い方に違いがあると指摘していた。すなわち、タイ人はあいづちの使用が少ないという分析結果である。しかし、本研究では、Iwasaki&Horie (1998) のタイ人の会話スタイルの記述にあった「あいづちが非常に少ない」という点について異なる結果が得られた。本研究結果を図 7 右に、Iwasaki&Horie (1998) の分析結果を図 7 左に再度提示し(第 2 章表 1 の再掲)、タイ人日本語学習者の聞き手行動を改めて比較する。

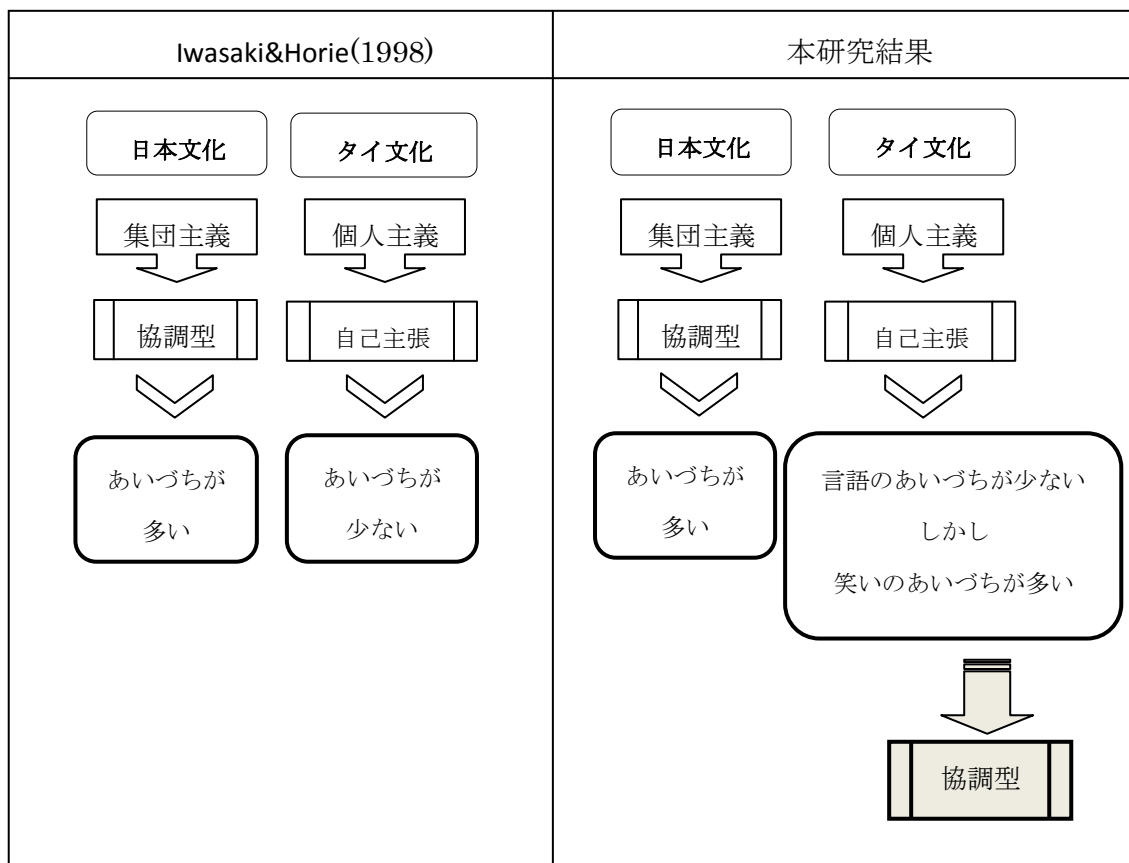


図 7 Iwasaki&Horie (1998) の分析結果と本研究結果との比較

図 7 に示したように、初中級レベルのタイ人日本語学習者は、言語のあいづちの使用が確かに少なかった。しかし、笑いのあいづちは多かった。これは、話し手が会話をスムーズに進められるようにという配慮の表れで、言語のあいづちの代わりに使用されていた。この結果から、タイ人は、会話の際、言語表現によるあいづちは少ないが、笑いをあいづちの一形態として使用していることが分かった。これは、生徒のインタビューで、笑いが相手との協調を表す態度であったことが語られたからである。

しかし、日本人には、こうしたタイ人の配慮の表れ・協調する態度としての笑いは理解できない。そのため、「ごまかし笑い」などと誤解されてしまう可能性も高い。そこで、学習者には、日本とタイの会話スタイルの違いを説明し、日本人と話すときには笑いのではなく、言語表現によるあいづちを打つことの重要性を初めから指導していく必要があるだろう。

次に、タイ人学習者のあいづちの使用上の問題をまとめる。

## 5.2 タイ人学習者のあいづちの使用上の問題

### 5.2.1 多すぎる笑い

本研究で観察されたあいづちの中で、「笑い」が一番多かった。生徒たちは、おもしろくて笑うだけではなく、「会話が静かにならないように笑った」「何を言ったらいいか分からなくて笑った」「緊張して笑った」という理由で笑っていた。これらの笑いは、不安や驚きや否定の笑いであった。また、生徒たちは、あいづちを打つ代わりに、「笑い」による「配慮」も表していた。これは、タイ人の会話スタイルであり、相手との「協調」の姿勢を表していた。

しかし、外国人にとって、おもしろくて笑う以外の笑いやほほえみ、特に深刻な場面での笑いやほほえみは、相手を不快にさせる可能性がある（ホームズ&タントンタウィー2000）。そのため、どんな場面でも笑って相手との協調を表すタイ人の会話スタイルを、日本語の会話に転用しないことが重要である。

### 5.2.2 間違えてしまった「へー↑」

現在、日本のアニメやドラマは、タイ人日本語学習者、特に高校生の間で流行っている。そのため、学習者の日本語の使い方には、それらのメディアからの影響が少なからず観察される。例えば、本調査で観察された「へー↑」がその1例である。「へー↑」を使用していた学習者は、アニメで「へー↑」を覚え、「びっくりするときに使うあいづちだ」と想像して日本語の会話でそれを使っていた。しかし、日本語母語話者のコメントから、「へー↑」はびっくりしたときであれば、だれに対しても使えるあいづちというわけではなく、親疎関係や上下人関係を考えながら使う必要があるあいづちであることが分かった。

こうしたあいづちの使用範囲については、タイ語の会話でも存在する。タイ語にも、相手との関係を考えて使わなければならないあいづちがある。そこで、日本語のあいづちについても、単に表現を教えるのではなく、親疎関係や上下関係といった指導もしなければならない。

### 5.2.3 タイ語のあいづちを多用することの印象の悪さ

初中級レベルのタイ人日本語学習者は日本人の先生と話すとき、タイ語のあいづちを多く使う傾向がみられた。日本語母語話者にとって日本語の会話で、日本語ではないあいづちを多く使用した場合、タイ語のあいづちだと理解できず、聞いているかどうかという不安な印象を与えることが分かった。また、タイ語のあいづちだと分かるが、印象の悪いあいづちの存在も明らかになった。そのタイ語のあいづちは、“๑๐๐” (๑๐๐)、“๑๐” (hǎʔ)、“ໂຮ” (hǒo)であった。

“๑๐๐” (๑๐๐)は、日本語にはない母音のため、日本語母語話者にとって、不愉快な印象を持たれる可能性が示唆された。“๑๐” (hǎʔ)は、日本語母語話者にとって、非難しながら問い返すという印象を与えると分かった。筆者も日本人の先生と話すときにうっかり「ハー↑」や「ハ↑」で聞き返したことがあり、今後留意して使わなければいけないという内省になった。“ໂຮ” (hǒo)は、日本語母語話者にとって、生徒が使うと不自然に聞こえ、目上の人に使うと失礼にもなると分かった。

“๑๐๐” (๑๐๐)のようなタイ語にしかないあいづちは、日本語母語話者にとってタイ語だと分かり、それほど悪い印象を与えなかった。しかし、“๑๐” (hǎʔ)や“ໂຮ” (hǒo)のような日本語に近いあいづちは、日本語と勘違いされ、失礼な印象や不自然な反応となってしまう可能性が示唆された。そこで、悪い印象を避けるため、生徒には、日本語の会話ではタイ語のあいづちを使用しないよう注意し、指導していく必要がある。

### 5.3 中等教育でのあいづち指導

現在、タイにおける日本語教育は、「話し手」に着目し、上手な話し手の育成を目標としている。これは、タイの中等教育で広く使用されている日本語教科書で打ち出されている点である。タイの日本語教科書には、会話を覚え、話し手としての立場の練習は多く挙げられているが、うなずきやあいづちといった聞き手としての立場の練習は少ない。そのため、タイ人日本語学習者は、上手な話し手にはなれるが、印象の悪い聞き手になってしまう可能性がある。

この問題を解決するために、タイ人日本語教師は日本の文化的特徴や日本語の会話スタイルの特徴を理解しておく必要がある。そして、初級レベルから「印象の良

い聞き手」になる方法を教えなければならない。そこで、本稿ではタイ語を母語とする高校生日本語学習者へのあいづち指導案を提案する。

最初の学習段階では、簡単な非言語行動のあいづちから練習する。初級の日本語がだいたい分かるようになったら、生徒が好きなアニメで言語のあいづちを勉強する。初中級レベルになったら、「笑い」をコントロールする練習するというステップを踏む。

特に、あいづちを教えるときには、その基本的な機能から教えていったら分かりやすいだろう。久保田（2001）は、あいづちの基本的な機能は 1)「聞いている」2)「理解」3)「同意」と指摘しており、以下の図 8 のような重層性を指摘している。

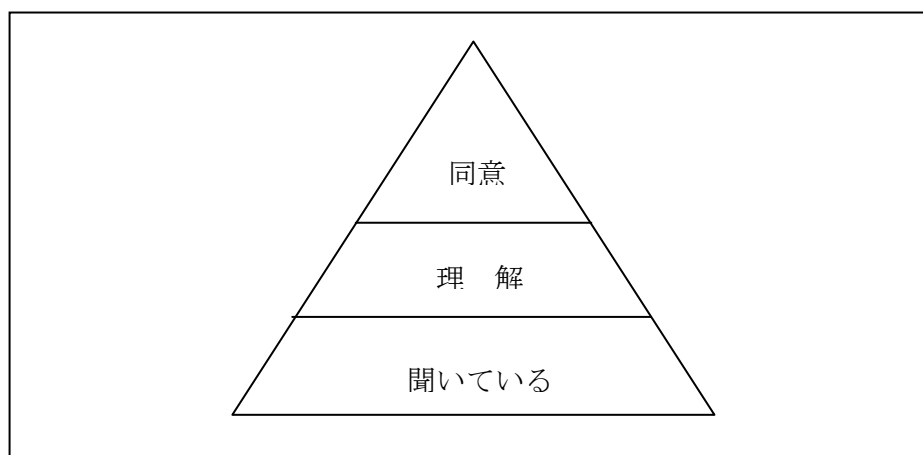


図 8 あいづちの機能の重層性（久保田 2001：45）

久保田（2001）の図 8 を参考にするならば、あいづち機能の土台となっている「聞いている」から勉強したら分かりやすいと考えられる。また、習得しやすい項目から習得しにくい項目へ、すなわち易から難へという順番で提示していくことも留意しておく必要がある。

表 17 に、第 2 章の表 3 で示した日本語のあいづち表現と、本調査でタイ人の生徒に観察されたあいづち表現とを比較した結果を提示し、習得上の困難度を検討する。



表 17 日本語のあいづちの例と観察されたあいづちとの比較

機能	あいづちの例		観察されたあいづち	
1.聞いている信号： 「不確定」	ハア アー エエ	ハイ ウン エ	ハイ 笑い ฉឹม (ʔum)	うなずき ฉឹอ (ʔuu)
2.理解信号： 「確定」	ナルホド ソウ エエ ソウデスネ ソウカナー	ア、ソウデス↓ ア、ソウカソウカ↓ アーソウナンダ ソウソウ	ฉົอ (ʔoo) 笑い ハイ	うなずき ฉေอ (ʔoo)
3.肯定信号	ウン	ソウソウソウ ハイハイハイハイ	ハイ ใช่ (chây)	肯定+笑い うなずき ฉေอ (ʔoo)
4.否定信号	イエ アー ウウン	イエイエ イイエ アソウデスカ	イヤ イイエ ฉឹม (ʔom) ฉေอ (huuu) ฉา (ʔaa)	否定+笑い 首を横に振る ไม่ใช่ (mâychây) ฉឹม (ʔom) ฉေး (ʔoo?)
5.感情表出	エーッ マジー ホー へー 怒り 悲しみ	エ↑ ホントウ↓ マア 笑い 喜び 驚き	エ↑ へー↑ エー↑ ฉေး (hóoy) หุ (hu) เฮอ (hóo)	笑い โท (hoo) ฉ่าว (ʔaw) เยอ (yoo) โฉอ (ʔo) โฉะ (ʔoo?) โทย (hóy)
6.その他	情報の追加・情報訂正・情報要求		ฮะ (háʔ)	ฮึ (huíʔ)

まず、あいづち表現で使用上の違いがあまりない項目が、1の聞いている信号、2の理解信号、3の肯定信号である。少し違いがある項目は4の否定信号であるが、これらはタイ人の生徒にとって習得しやすいあいづち表現だと考えられる。一方、表現上大きな違いがある項目が、6のその他（情報追加・情報訂正・情報要求）と、5の感情表出である。この部分はタイ語でのあいづちの使用が多かったことから、日本語でのあいづちが習得しにくい部分だと想定される。そこで、こうしたあいづちの機能を踏まえ、具体的に次のような指導ステップを提案する。

第1ステップは、1の「聞いている信号」のあいづちから指導する。日本語のあいづち表現の多様性もなく、タイ人の生徒のあいづちも日本語のあいづちに似ているため、習得しやすいと考えられる。

第2ステップは、2の「理解信号」のあいづちを指導する。これは1の「聞いている信号」のあいづちに近いという点から、習得しやすいだろう。しかし、理解の

あいづちの中で、タイ人の生徒はタイ語のあいづちの“๑๐๐” (๑๐๐) をよく使う傾向があるため、注意する必要がある。

第3ステップは、3の「肯定信号」のあいづちを指導する。日本語のあいづちでは、非常に賛成していると伝えたいとき、「ソウソウソウソウ」と表現を繰り返す形式のあいづちが使われることがある。しかし、タイ語ではそうした場合には強く発音するといった違いがある。こうした相違点を教えなければならない。

第4ステップは、4の「否定信号」のあいづちを指導する。これは直接断るような状況で、失礼にならないようにするための断り方を生徒と話し合ったりして考えるとよい。特に、話し手が目上の場合には気を付けるようにという点を教える必要がある。

第5ステップは、6の「その他」で情報の追加・情報訂正・情報要求を指導する。注意点は、タイ人が多く使っている“๓๓” (hǎ?) が日本人にとって悪い印象を与えるという点である。“๓๓” (hǎ?) の代わりにどのようなあいづちを打てばよいか、または、どのように聞き返したらよいかを検討すべきである。

最後は5の「感情表出」を指導する。タイ人の生徒は、日本語の会話の中で様々な感情を表出するタイ語のあいづちを使っていた。そこで、表17に示したタイ語のあいづちでの感情表出を日本語のあいづちに置き換える指導をする。

それぞれの段階は、短いあいづちから長いあいづちへと勉強し、表現だけでなく、適切さも一緒に勉強していく。このようなプロセスで第6ステップまで終わったら、自立学習することも可能になるだろう。生徒がアニメなどで聞いたあいづちを持ち寄って、クラスの友達と一緒にシェアすることもできるだろう。以上の指導ステップをまとめたものが図9である。

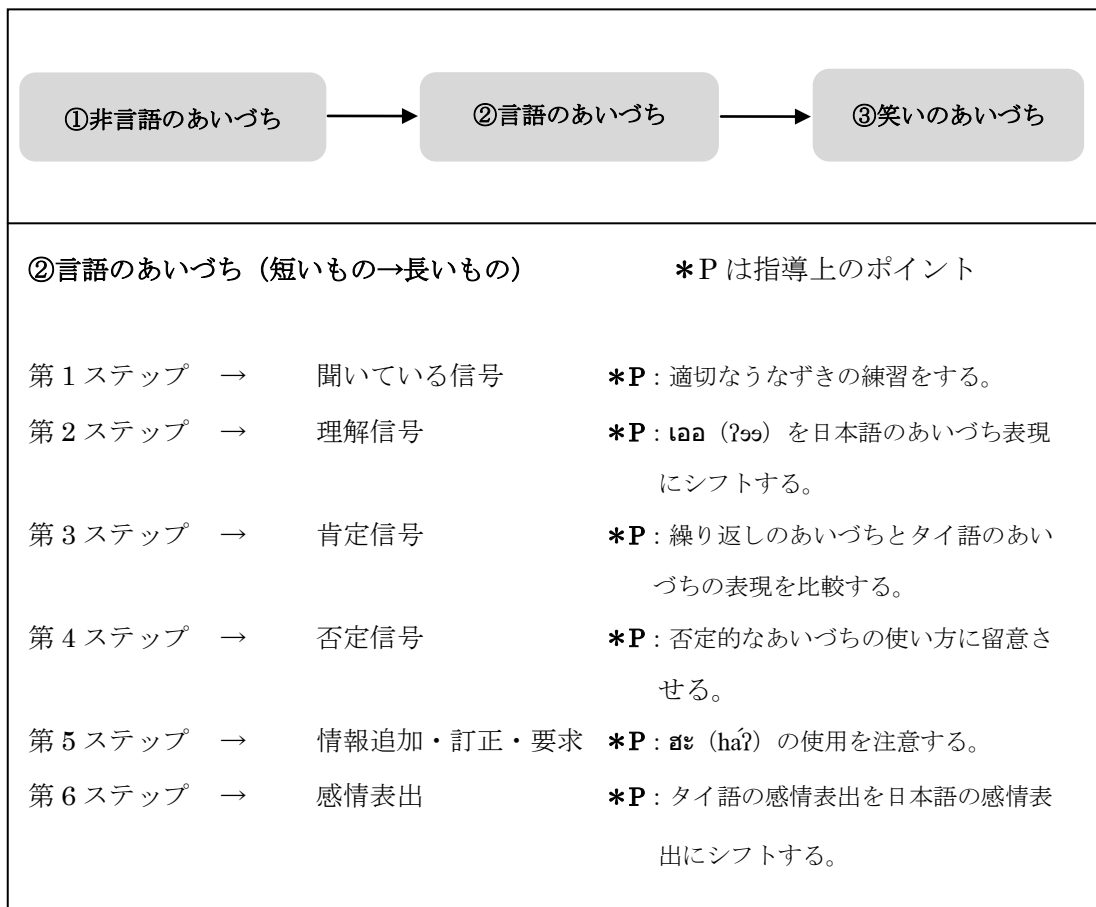


図9 初中級レベルの高校生日本語学習者へのあいづち指導案

#### 5.4 今後の課題

今後の課題は、本研究では調査人数が11名であったため、対象者の人数を増やし、さらにあいづちの使用実態調査を行っていくべきであると考えられる。例えば、本研究結果で明らかになった“ເືອ” (ʔəə) について、このあいづちを使ってしまうと悪い印象を与えるが、他の (ə) があるタイ語のあいづちについても同様に悪い印象を与えるかなどについてである。また、本研究では、親しい先生との会話で観察されたあいづちを分析したため、初対面の人との会話の場合ではどうかについても分析する必要があるだろう。そして、日本語に慣れてきた中級や上級レベルの学習者はどのようにあいづちを打っているのか、本研究で調査した初中級レベルの生徒のあいづち使用の結果と違うのかどうかといった点についても調査したい。さらに、本研究の結果で最も多かった「笑い」について、聞き手がそれぞれの笑いを聞

いたら、話し手がどういう意味を伝えたと思うかという点を調べたり、音声が伴う笑いだけではなく、表情・身体動作の笑いの文化差についても、さらに調べていきたい。最後に、タイ人日本語学習者のために様々な場面でどのように適切なあいづちを教えたらいいかについても、今後の課題にしたい。

## 参考文献

- 池上嘉彦・守屋三千代（2009）「第 5 章・日本語話者は共同で話す」『自然な日本語を教えるために－認知言語学をふまえて』 pp.150-151、ひつじ書房
- 今石幸子（1993）「聞き手の行動－あいづちの規定条件－」『大阪日本語研究』第 5 号、pp.95-109、大阪大学
- 大浜るい子（2002）「相づち使用と対人関係」『広島大学日本語教育研究』12 号、pp.1-9、広島大学
- 大関浩美（2010）『日本語を教えるための第二言語習得入門』くろしお出版
- カノックワン・ラオハブラナキット・片桐（2012）「非母語話者には難しい母語話者の日本語コミュニケーション」『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 pp.23-42、くろしお出版
- カノックワン・ラオハブラナキット・片桐、富岡裕（2011）『らくらくタイ語聴き取り練習帳』チュラーロンコーン大学
- 久保田真弓（2001）『「あいづち」は人を活かす－新しいコミュニケーションのすすめ－』廣済堂出版
- 郡史郎（1985）「笑い声の聞きとりにおける文化差日本人とイタリア人の場合」『音声言語』1 号、pp.128-142、近畿音声言語研究会
- メイナード・K・泉子（1997）「第 8 章 日米会話におけるあいづちの対象分析」『日英語対照研究シリーズ（2） 会話分析』 pp.158-160、くろしお出版
- ホームズ・ヘンリー、タントンタウィー・スチャーター『タイ人と働く ヒエルキー的社会と気配りの世界』株式会社めんこ
- 堀口純子（1988）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64 号、pp.13-26、日本語教育学会
- 堀口純子（1997）『日本語教育会話分析』くろしお出版
- ザトラウスキー・ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- 宮本マラシー（1988）「タイ語のあいづち（特集・あいづち）」『日本語学』第 7 巻 13 号、pp.24-30、明治書院

- 八代京子、世良時子 (2010) 『日本語教師のための異文化理解とコミュニケーションスキル』 三修社
- 理口隆子 (2007) 「多声的ビジュアルエスノグラフィーによる教師の思考と信念研究」 『はじめての質的研究 教育・学習編』 pp.296-317、東京図書株式会社
- Anchalee Wannaruk (1997) Back-channel behavior in Thai and American casual telephone conversations, *Suranaree J. Sci Technol. Vol.4 No.3; September-December 1997*, p.168-171
- Iwasaki Shoichi and Preeya Ingkaphirom Horie (1998) The ‘Northridge Earthquake’ Conversations: Conversational Patterns in Japanese and Thai and their Cultural Significance, *Discourse and society Vol.9 No.4*, pp. 502-529
- Mizutani Osamu and Mizutani Nobuko (1987) *How to be polite in Japanese*, The Japan times, Ltd.